

1641年 新しいコンテキストとパブリックな視角

著者	ジェーン・オーマイヤ, 後藤 はる美(訳)
著者別名	Jane OHLMEYER
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	22号別冊
ページ	147-157
発行年	2019-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011430/

1641年 —新しいコンテキストとパブリックな視角—*

ジェーン・オーマイヤ** (後藤 はる美訳***)

1641年10月22日にアイルランドで発生した反乱は、その後10年続く内戦開始の引き金となった。当局はダブリン城奪取の試みを妨害しようとしたが、カトリック反乱軍がアルスタの戦略的拠点を占領するのを防げなかった。1641年の冬から1642年の春にかけて、反乱は国の残りの地域をのみ込んで拡大した。蜂起は極度の暴力をとめない、カトリックはプロテスタントの隣人たちを襲い、強奪し、殺害した。プロテスタントは同等の武力をもって応酬し、アイルランド史上、最も残忍な党派的暴力の時代の一つに帰結することとなった。反乱とその後の戦いで命を落とした男女と子供の総数は、永遠に知りようがない。しかし、1798年蜂起や「騒乱 the Troubles」として知られる20世紀の内戦の死者よりも、おそらくは1640年代の展開のなかで亡くなった人のほうが多い。

これらの出来事に関係する最重要史料は、「1641年反乱の被害者による宣誓供述書 the 1641 Depositions」である。「アイルランド史上、最も論争的な文書」とも呼ばれるこの史料は、1641年反乱の発生にまつわる出来事を基本的にプロテスタント・コミュニティの側から記録したものである¹。1642年9月7日付のレディ・アン・バトラーの宣誓供述はその典型である。彼女の証言は、彼女が何者であるかと、彼女が何を失ったかから始まる。

The La Dame Ann Butler wife vnto Sir Thomas Butler of Rath healin in the County of Catherlagh knight and Barr{onet} of Carlow duly sworne and examined deposeth that since about st patricks day last & since shee hath beene was robed and deprived of her lands rents goods and chattells to the vallues following, by means of this rebellion In sheepe Cowes oxen yong cattle and ould, In breeding mares sadle mares catch horses, Geldings, and other Cattle. (カーロウ県ラス・ヒーリンの騎士にしてカーロウ准男爵サー・トーマス・バトラーの妻アン・バトラーは、正しく宣誓し、次のように審問に答えて証言した。

* 本稿は、以下の論集の序章と、私の現在進行中の戦争未亡人に関する研究にもとづいている。Jane Ohlmeyer and Micheál Ó Siochru (eds.), *Ireland 1641: contexts and reactions* (Manchester, 2013; paperback 2014).

** アイルランド・トリニティ・カレッジ・ダブリン大学歴史学部

*** 人間科学総合研究所研究員・東洋大学文学部

¹ John Gibney, 'The most controversial documents in Irish history?', *History Ireland*, 19 (2011), p. 18.

すなわち、先の聖パトリックの日以来、彼女は土地、地代、家畜を強奪され、またその状態に置かれ続けており、この反乱において次に相当するものを失った。羊、牝牛、雄牛、若い、あるいは年かさの牛。繁殖雌馬、乗馬用雌馬、捕獲用雄馬(?)、去勢雄馬、およびその他の牛……)²。

彼女の損害の長大なリストは、4906ポンド5シリング4ペンスという驚くべき値に達した。現在では一財産となる額である。続いてレディ・アンは、これらの非道な行為を行った男たち——明らかに彼女がよく知っている者たち——を特定し、彼らがどのように彼女の家を焼き、略奪したかを語った。彼女は、彼女と家族はその後、拘束のもとでキルケニーに連行され、拷問と死の恐怖に晒され続けた——なぜなら「彼らは不快なピューリタンのプロテスタントだったから」——と供述した。

自身の体験を生き生きと述べたあと、レディ・アンは、あるイングランド女性の体験を詳しく話した。ジェーン・ジョーンズという、とくに双子の新生児の惨たらしい殺害を含む痛ましい事件の目撃者であるとされる人物である。

Jane jones said she { } had scene to {the} number of 35 English goinge to exicution and that shee had scene{t}hem when they wea{re exe}cuted, {their bodyes} espos{ed to devour}ing {Ravens and} not soe mu{ch as a bur}jial> Another English woman who was nuly deliuered of two childeren in one birth they violently compelled her in her greate payne and siknesse to rise from her childbed and tooke the infant that was left aliue and dash{ed} his braines against the stones and after thrue him into the riuier of {the} Barrow: and the deponent one day hauing a peece of sammon to dyner on Mr Bryan Cauonoghs *wife* being with her: shee *the said Mrs Reanall* refused to eate any parte o{f} the samon and being demanded the reason shee said she would not {eate} any ffish that came out of the Barrow because shee had scene s{everall} infants bodyes and other carkases taken {of the} {Eng}lish taken vp in {the weares}. (ジェーン・ジョーンズは、35人のイングランド人が処刑のために連行され、処刑され、彼らの遺体が埋葬されることもなくカラスに食い尽くされるよう晒されたのを見た、と述べた。また、別のイングランド人女性は、一度に二人の赤子を生んだが、彼ら〔反徒たち〕は産褥の床でひどく苦しみ病んでいた彼女を起き上がらせ、残された乳児を取り上げて生きたまま頭を石で打ち砕き、その後バロウ川に投げ込んだと言う。同供述者は、ある日、彼女とともにいたブライアン・キャベナー氏の妻と食事した際、鮭を一切れ供された。このレイノー夫人は、その鮭を一口も口にせず、理由を問われると、何人もの幼児の遺体やその他の戦争で失われたイングランド人の遺骸を見たから、バロウ川からの魚は食べないのだと語った。)

レディ・アンは、彼女のキルケニーでの幽閉の話で供述を締めくくる——「彼女とその家族はプロテ

² TCD, 1641 Depositions Project, online transcript January 1970 [http://1641.tcd.ie/deposition.php?depID<?php echo 812069r093?>] accessed Tuesday 02 August 2011.

スタントで、ミサに現れないから」反徒は彼女を助けようとはしなかった、と³。この並外れた、しかし典型的でもある、目撃証言と伝聞、事実と虚構を織り交ぜた語りは、私たちがあ一般女性の体験を追体験することを可能にする。それは、1641年の反乱の勃発から、彼女とその家族が苦闘した対立と恐怖、トラウマの体験である。

本稿の課題は三つある。第一に、1641年反乱の宣誓供述書とそのオンライン化プロジェクト (the Depositions Project) を紹介したい。第二に、同プロジェクトがどのようにして新しい思考が生まれるのを助け、帝国主義と内戦の遺産からアイルランド史を解放する新解釈を可能にし、そしてその代わりにアイルランド史をまったく別のコンテキスト——とりわけ社会史——の文脈に置き直すことを可能にしたかについて若干の事例を紹介したい。第三に、歴史と記憶についてふれ、1641年の宣誓供述書がどのように公衆の思考と認識を形づくってきたかを考えたい。

I. 1641年反乱の宣誓供述書とオンライン化プロジェクト

あらゆる階層に属する何千人もの男女による8千件の宣誓供述書、目撃証言、審問書、およびその他の関連文書は計31巻、1万9千10頁にわたり、トリニティ・カレッジ・ダブリン大学の文書史料研究センターに現存している⁴。これらの史料は、一切の動産への損害や軍事行動、アイルランド人反徒によって犯されたとされる犯罪——暴行、投獄、衣服の剥奪や殺人——を記録している。同史料は、死と同じくらいに債務について明らかにする。これらは非凡な人物のそれと同じくらい、普通の人びとの伝記や希望、恐怖を再現するものである。

宣誓供述書は法的文書であり、ある情報は各文書に標準的なものである。供述者の名前と住所は常に記録され、多くの場合は職業と年齢も書き留められた。もし書くことができれば、供述者は通常彼らの供述に署名を行い、もし署名できなければ記号を書き残した。供述書は9万を超える犠牲者や襲撃者、傍観者や観察者の名を記録し、アイルランドのすべての県 (county)、教区 (parish)、および郡 (barony) への言及を含んでいる。レディ・アンの証言が示すように、書き起こされた供述書でさえ読むには困難をとまなう (原史料の一部は事実上、判読不能である)。17世紀の言語は現代人の目には馴染みがないものだ——綴りは一貫せず不規則で、文法についても同様、句読点も欠けている。さらに手書き文字にもかなりの多様性がある。

1641年反乱の宣誓供述書は、「単一目的 single-purpose」の史料群である。東南アジアの大量虐殺に関する歴史を専門とするベン・キアナン (Ben Kiernan) は、「単一目的史料群は、その定義からして、完全なコンテキストを記録するものではない。…したがって、史料群が語らないものは、それが

³ Ibid.

⁴ 11巻がレンスタ、10巻がマンスタ (そのうち7巻がコーク県)、2巻がコノート、8巻がアルスタに関わる供述書を収録している。これらの史料は、1741年にスターン司教が同コレクションをトリニティ・カレッジ・ダブリン大学に寄贈して以来、同大学に保管されている。1641年反乱の宣誓供述書に関する最善の入門は、今でも以下である。Aidan Clarke, 'The 1641 depositions' in P. Fox (ed.), *Treasures of the library, Trinity College Dublin* (Dublin, 1986), pp. 111-122.

語るものと同じくらい重要なのだ。…とくに単一目的史料群においては、証拠の不在は、不在の証拠とはならないのである⁵。したがって、1641～1642年の冬にかけてのカトリック側の損害や、カトリック・コミュニティが被った政府軍の手による虐殺について記録した、〔供述書に〕匹敵する史料は存在しない。しかし、1641年反乱の宣誓供述書はなお、反乱がプロテスタント入植者の広範な虐殺から始まったという激しい論争を生む主張の主要な証拠となっている。その結果、同史料はアイルランド史上、最も長引く激しい論争の中心を成してきた。宣誓供述書は、アイルランド史上最も論争的な史料であると言われてさえいる⁶。扇動者、政治家、および歴史家はすべて、それぞれ異なる機会に同史料を利用してきており、これをめぐる論争は一度も十分な決着をみていない。実際、1641年の「大虐殺 massacre」は、ロンドンデリー包囲戦(1688年)やウィリアム3世のボインの勝利(1690年)、ソムムの戦い(1916年)と同様に、プロテスタント／ブリテンの集会的アイデンティティを創出し維持するうえで重要な役割を果たしてきた。ある集団にとっては、現代世界の他所ではほとんどみられないやり方で、公衆の記憶のなかで17世紀はいまだ生きているという。しかし、21世紀における党派的緊張の緩和にともなって、アイルランドの17世紀はついに記憶から歴史へと移り変わるのかもしれない⁷。

1641年反乱の宣誓供述書オンライン化(1641 Depositions)プロジェクトはこのプロセスの一部を成すものである。そして、おそらくそれがアイルランドとイギリスの研究助成機構が同企画を支援した理由の一つだろう。同様に、生き生きとした党派的な供述書の内容は、これを1930年代に出版しようとしたアイルランド文書史料委員会の試みがなぜ失敗したかを説明する。1935年10月付の政府刊行物発行局からアイルランド文書史料委員会の委員長に送られた手紙には、検閲官は「委員会の出版計画に介入することはできない」が、「よりぞっとする内容の供述書が明るみに出れば、ちょっとした騒ぎが起こることは目に見える…いかなる意図の選別も妨害にあたると思われる。にもかかわらず、検閲の実施について何か言うべきことがあると我々は考える」とある。1969年の北アイルランドにおける「騒乱 Troubles」の発生が、もう一つの別の試みを妨害した⁸。今回の試みは、三度目の正直だったのだ。

1641年反乱の宣誓供述書オンライン化プロジェクト(2007～2010年)は、供述書を保存し、デジタル化し、書き起こして、TEI(Text Encoding Initiative〔人文学資料のデジタル化の規格を定めるコンソーシアム])に完全に適合する形式でオンライン化することを目標とした。これは、トリニティ

⁵ Ohlmeyer and Ó Siochrú (eds.), *Ireland 1641*, pp. 3, 265.

⁶ John Gibney, 'The most controversial documents in Irish history?', *History Ireland*, 19 (2011), pp. 18-19.

⁷ Toby Barnard, 'Parlour entertainment in an evening': histories of the 1640s' in Ó Siochrú (ed.), *Kingdoms in crisis*, pp. 20-43; Clare O' Halloran, *Golden ages and barbarous nations: antiquarian debate and cultural politics in Ireland, c.1750-1800* (Cork, 2004); および Guy Beiner, *Remembering the year of the French. Irish folk history and social memory* (Wisconsin, 2007).

⁸ 関係する手紙を提供してくれた Deidre McMahon に謝意を表する。Michael Kennedy and Deidre McMahon, *Reconstructing Ireland's past. A history of the Irish Manuscripts Commission* (Irish Manuscripts Commission, Dublin, 2009), pp. 70-73.

・カレッジ・ダブリン大学、アバディーン大学およびケンブリッジ大学の共同プロジェクトであり、IBM社（LanguageWare）およびEneclann社との提携によって行われた⁹。歴史家と地理学者、コンピュータ科学者、言語学者および文学者による学際的プロジェクトである。2010年10月に1641年反乱の宣誓供述書はオンラインで公開され（www.1641.tcd.ie）、アイルランド文書史料委員会は全12巻の書籍版を現在刊行中である¹⁰。オンライン化プロジェクトは、かつては不可能だった方法でただちに人びとの想像力をとらえた。同企画はアイルランドおよび世界中でニュースの一面を飾り、特集や意見や記事が地方紙や全国紙に掲載された——*The Irish Times*、*The Irish Independent*、*The Irish News*、*The Newsletter*、*The Belfast Telegraph*、さらに、国際版をもつ *The Independent*、*The Guardian* および *The New York Times* などである。RTE、BBC、CBS および ABC 放送局もこのプロジェクトに関するニュースや特集を報じた。2018年までに同ウェブサイトには111カ国から2万3千人を超える利用者登録があり、その大半は北米とヨーロッパ、とくにアイルランドとイギリスに拠点をもつ人たちだったが、少なくない数の南アメリカ、インド、およびオーストラリアの利用者も含まれた。

オンライン化プロジェクトは、多くの重要な関連プロジェクトを生み出した。「1641年反乱の宣誓供述書にみる言語と言語学的証拠に関する研究 *The Language and Linguistic Evidence in the 1641 Depositions*」がAHRCの助成を受けた（2010～2011年）。これは、近世英語の証言録のデジタル・コーパスに取り組む新しい方法を開発することをめざした学際的プロジェクトだった。言語学的分析と結果の視覚化の双方のために開発された革新的なソフトウェア一式を用いて、同プロジェクトは供述書に現れる様々な言語学的問題について考察した。洗練された法言語学と批判言語学分析を利用して、この時代に法的、政治的、および宗教的問題を語るためにどのように言語が用いられたかを調査し、同コーパスに現れる対立に関する言語を理解しようとした試みである。その成果はいくつかの魅力的な「展示」と「デモ」をはじめ、オンラインで公開されているほか、様々な出版形態でこれから公刊予定である¹¹。

部分的にはIBM社との緊密な協働と、私たちがもつより広いデジタル人文学コミュニティとの連

⁹ 2007年に始まり、2011年に完了した同プロジェクトの主要な調査員は以下である。Professor Jane Ohlmeyer, Dr Micheál Ó Siochru, Professor John Morrill および Professor Thomas Bartlett. Aidan Clarke は、書き起こした史料を編集した。同プロジェクトに参加した研究者は以下である。Dr Edda Frankot, Dr Annaleigh Margey および Dr Elaine Murphy. オンライン公開された同史料は、以下のサイトを参照。<http://1641.tcd.ie>.

¹⁰ Vol I. *Armagh, TCD, MS 836, Louth TCD, MS 834, Monaghan TCD, MS 834* (IMC, Dublin, 2014), Vol II., *Cavan, TCD, MS 832 & MS 833, Fermanagh TCD, MS 835* (IMC, Dublin, 2014), Vol III., *Antrim, TCD, MS 838, Derry, TCD, MS 839, Donegal, TCD, MS 839, Down, TCD, MS 837, Tyrone, TCD, MS 839* (IMC, Dublin, 2014) and Vol IV., *Dublin* (IMC, Dublin, 2017).

¹¹ The 1641 Collaborative Linguistic Research and Learning Environment の公式ウェブサイト。<http://kdeg-vm-15.cs.tcd.ie/omeka-1.2.1/about>. Barbara A. Fennell and Mark Sweetnam, 'The 1641 Depositions: a case study in colonial linguistic development' (準備中); Mark Sweetnam, 'Natural language processing and early modern dirty data: IBM Language Ware and the 1641 Depositions', *Linguistic and Literary Computing* (審査中); S. Lawless, D. O'Regan, K. Levachier and Mark Sweetnam, 'Natural language processing in the digital humanities-IBM LanguageWare: a linguistic case study', *Digital Humanities Quarterly* (審査中).

携のおかげで、オンライン化プロジェクトはテクノロジー・プロジェクトのフラッグシップともなり、新プロジェクト CULTURA (CULTivating Understanding Through Research and Adaptivity) のもとで極めて競争的なヨーロッパの研究助成を獲得した。CULTURA は、EU FP7 の助成による3年間(2011~2014年)の特定研究プロジェクト (Specific Targeted Research Projects, STReP) で、ソフィア大学、バドバ大学、グラーツ大学、および IBM 社 (ハイファおよびダブリン) とロンドンおよびソフィアに拠点のある Commetric 社の提携によって実施された¹²。デジタルな文化遺産の管理者とプロバイダが直面する重大な課題は、デジタル人文学コレクションを調査し、[クロスサーチといった]コレクション間の相互連関を増大、強化することである。このためには、1641年反乱の宣誓供述書のような文化的遺物が様々なコミュニティによって体験され、利用される方法自体に根本的な変化をもたらす必要がある。そのため、CULTURA は、多次元の適用性を備えた新形態を提供する次世代の適応系の開発を先導した。CULTURA コンソーシアムは、実際のエンドユーザーのニーズに応え、社会的インパクトを最大化し、商業化の成功の基礎を築くことに力点を置いている。私たちはこのために、ダブリンの指導的な文化施設 (国立文書館、国立図書館、国立博物館およびダブリン市立図書館)、地方史/家族史協会、および企業と市井の研究者や学校の生徒たちと緊密に協働してきた。

歴史研究者の視点からすれば、テクノロジーがもたらす可能性には実に心躍るものがある。1641年反乱の宣誓供述書がデジタル形式で自由に手に入り、同反乱に関係する多くの印刷されたパンフレットと歴史書が Early English Books Online (EEBO) や Eighteenth-Century Collections Online (ECCO) によって電子的に読めるようになった事実は、たとえば、手稿文書のフォリオ頁と印刷物の頁の両方に現れる重要なフレーズを特定することを可能にする。もちろん、これを実現するためには、現在はまだ可能ではない方法でこれらのデジタル・リソースを相互に関連付けて利用する方法が必要ではある。しかし、同供述書データベースや EEBO、ECCO が、英国人名事典 (ODNB) やアイルランド人名事典 (Dictionary of Irish Biography)、アイルランド政府文書、アイルランド債務証書記録、近世にスカンディナヴィア、スペイン、フランスで戦った軍隊のアイルランド兵士を記録した軍事移民データセット、といった他のデジタル・リソースとリンクしたときの研究の可能性を想像してみよう¹³。デジタル・データの構築から、これらのリソースをいかに調査するかへと力点が移るにつれて、またテクノロジーがいっそう洗練され、ユーザーフレンドリーになるにつれて、歴史家は——文学者、歴史地理学者、言語学者、コンピュータ科学者とともに——これらの史資料を調査し、現在は想像もできない方法で成果を発表することができるようになるだろう¹⁴。

¹² <http://www.cultura-strep.eu/home>.

¹³ Jane Ohlmeyer and Éamonn Ó Ciardha (eds.), *The Irish statute staple books, 1596-1687* (Dublin, 1998); Steve Murdoch と Alexia Grosjean が、主にスカンディナヴィアの軍隊に従軍した「ブリテン人 (イングランド人、スコットランド人、アイルランド人)」の将校のプロフィールを取録した関係データベースを構築している (これには、スコットランド出身だがアイルランドに住む数百人の男性と、若干名のカトリックのアイルランド人が含まれている)。
‘Scotland, Scandinavia and Northern Europe 1580-1707’ database <https://www.st-andrews.ac.uk/history/ssne/>.

II. 1641年についての新たな視角

約10年が経過し、1641年反乱の宣誓供述書オンライン化プロジェクトの影響が目に見え始めている。手稿史料へのアクセスが容易になったことで学部生が学位論文や「専門科目」、その他のコースの一環でこれらを研究できるようになった。新世代の修士課程、博士課程の院生たちは、ポストドクトともに同史料に関連する無数の主題に取り組んでいる。その学問的努力の成果は出版物として現れ始めているが、多くは未刊行のままである¹⁵。

明らかなのは、1641年反乱の宣誓供述書は、植民地および戦時社会を再構築し、残虐行為と虐殺、民族浄化にまつわる学際的な問題を考察するために用いられていることだ。私たちは、歴史学、地理学、文学、人類学の様々な視点から、研究者たちがいかにこの史料に接近するかを見てきた。彼らはこの虐殺を近世アイルランド、近世ヨーロッパ、および近世世界のコンテキストに置き、供述書とそれが記録する出来事の両方をいかに研究できるかを概念化する新たな方法を示唆している。

多くの人が、私たちの1641年の理解に対して重要な貢献をもたらした——エイドリアン・クラーク、ニコラス・キャニー、ウィリアム・スミスなどである¹⁶。別の、とりわけアイルランドを専門としない研究者たちは、関連する地域や学問分野から新たな視角と洞察を摂取するとともに、どことならより意味ある比較ができるかについてのアイデアを取り入れてきた¹⁷。たとえば、1641年の虐殺は、ウクライナにおけるフメリニツキーの乱と関連付けられる民族的、党派的暴力と比較できるかもしれない。この反乱においては、何万ものユダヤ人とポーランド人が殺された。あるいは、ステンカ・ラージンの乱でロシア人兵士が何千ものコサックを殺害したときと比べることができるかもしれない。同様に、私たちの1641年反乱の知識は、先住民と新参者が暴力的に衝突した地域の他の歴史に対して示唆することが多くある。たとえば、18世紀半ばのビルマ-カンボジアのデルタ地帯で起

¹⁴ Mark Greengrass and Lorna Hughes (eds.), *The virtual representation of the past* (London, 2008).

¹⁵ Inga Volmer, 'A comparative study of massacres during the wars of the three kingdoms, 1641-1653' (PhD thesis, Cambridge, 2007); Ciska Neyts, 'The rider on the horse. Warfare during the outbreak of the 1641 rebellion in four Ulster counties' (MPhil thesis, Trinity College, Dublin, 2010); Naomi McAreavey, 'Re(-)membering women: Protestant women's victim testimonies during the Irish rising of 1641'. *Journal of the Northern Renaissance*, 2 (2010). <http://www.northernrenaissance.org/re-membering-women-protestant-womens-victim-testimonies-during-the-irish-rising-of-1641/>; Marie Louise Coolahan, *Women, writing, and language in early modern Ireland* (Oxford University Press, 2010); Eamon Darcy, Annaleigh Margey and Elaine Murphy (eds.), *The 1641 Depositions and the Irish rebellion* (London, 2012); John Gibney, *The shadow of a year: the 1641 rebellion in Irish history and memory* (Madison, 2013); Eamon Darcy, *The Irish rebellion of 1641 and the wars of the three kingdoms* (London, 2013).

¹⁶ Clarke 'The 1641 depositions' in Fox (ed.), *Treasures of the library*, pp. 111-122 and 'The commission for the despoiled subject, 1641-7' in Brian MacCuarta (ed.), *Reshaping Ireland 1550-1700. Colonization and its consequences. Essays presented to Nicholas Canny* (Dublin, 2011), pp. 241-260. Nicholas Canny は、供述書を多様な研究で広範囲に利用している。 *Making Ireland British, 1580-1650* (Oxford, 2001), 'The 1641 Depositions as a source for the writing of social history: County Cork as a case study' in P. O'Flanagan and Cornelius Buttimer (eds.), *Cork: history and society* (Dublin, 1993), pp. 249-308 および 'Religion, politics and the Irish rising of 1641' in J. Devlin and R. Fanning (eds.), *Religion and identity* (Dublin, 1997), pp. 40-70. また、William Smyth, *Map-making, landscapes and memory. A geography of colonial and early modern Ireland c1530-1750* (Cork, 2006) もある。

こった事件や、近代の他の対立、あるいは、バルカンやルワンダ、スリランカのことがすぐに頭に浮かぶ。

より比較的なアプローチを用いることで、大量殺人と残虐行為、虐殺の事件を引き起こした、あるいはそれを取り巻く出来事を最もよく分析するにはどうすべきかについて、歴史家はより多く学べるかもしれない。一例として、ジョン・ウォルタの仕事——パフォーマティブな暴力が行為者と犠牲者、目撃者のあいだの交渉の過程においていかに対立するかについての研究——を考えてみよう。ウォルタは、1641年反乱の宣誓供述書に内在する、パフォーマティブな暴力に焦点を当て、史料のバイアスを乗り越え、1641年の暴力を形づくった思想を再現しようとした。人類学と近世イングランドにおける民衆暴力と政治の「新しい社会史」と呼ばれてきた一連の研究から着想を得て、ウォルタはアイルランド反乱における暴力のパターンの意味を考えるための比較的視角を提供している。彼は1641年反乱の宣誓供述書と、それと匹敵するイングランドの法廷史料群のあいだにみられる類似性と差異を強調する。そして、供述書にはイングランドの史料に特徴的な法廷の定型文や定式化された暴力の叙述が欠如していると考察し、イングランドの史料を扱う者にとって驚きなのは、「供述書に「記録された」証拠にしばしばみられる高度な圧縮性である」と記している¹⁷。またウォルタは、政治的エリートと小農の怒りからなる二部制の反乱という影響力あるモデルの適合性を疑問視し、アイルランドの地主と都市社会の双方が暴力に同等に巻き込まれていた一方で、民衆の参加は、民衆の政治的関与がより大きかったことを示すと示唆している。

「新しい視角」の第二の例としては、私が近年取り組んでいる戦争未亡人と1641年反乱の宣誓供述書に関する研究を紹介したい。未亡人は全女性供述者の4/5を占めているようだ。512人の未亡人のなかには、戦争開始よりも前から未亡人だった175人(34%)の下位集団(すなわち「戦争以前の未亡人」)がいる。これらの未亡人の75%の供述書は、事件の発生から24ヵ月以内に聴取されており、これは彼女らの供述に即時性と生の感覚を付与している。なぜならこれらの女性たちは、物的損害と家庭や愛する者たちを守ろうとした彼女たちのむなしい努力、夫や子、親、家族、友人、隣人の悲劇的で往々にしてぞっとする最期、彼女ら自身が強奪され、襲われ、衣類を剥がれ、囚われた——これらは往々にしてよく知る隣人、奉公人、小作人、あるいは地元の貴顕によってなされた——体験を詳しく語ったからである。目撃および伝聞証言のなかで、未亡人たちは襲われた人びとや襲撃者の声を想起する。証言には長く詳しいものも、数文しかないものもある。供述書は往々にして、感

¹⁷ たとえば、以下を参照。Hilary Simms, 'Violence in County Armagh, 1641' in Brian Mc Cuarta (ed.), *Ulster 1641: aspects of the rising*, (Belfast, 1993), pp. 122-138; Aoife Duignan, "'All in confused opposition to each other": Politics and war in Connacht, 1641-9' (unpublished PhD thesis, University College, Dublin, 2006); Charlene McCoy, 'War and revolution: County Fermanagh and its borders, c1640-c1666' (unpublished PhD thesis, Trinity College Dublin, 2007); Brendan Scott, 'Reporting the 1641 rising in Cavan and Leitrim' in Brendan Scott (ed.), *Culture and society in early modern Breifne/Cavan* (Dublin, 2009), pp. 200-214; Jason McHugh, 'For our owne defence': Catholic insurrection in Wexford, 1641-2' in MacCuarta (ed.), *Reshaping Ireland 1550-1700*, pp. 214-240; Ciska Neyts, 'Mapping the outbreak of the rebellion: robberies in County Cavan (October 1641)' in Darcy, Margey and Murphy (eds.), *The 1641 Depositions*.

¹⁸ Ohlmeyer and Ó Siochrú (eds.), *Ireland 1641*, pp. 135-136.

情と音、光景と感覚に満ちている。私は、これらの女性たちが何者か、また、彼らの社会的地位やどこからやって来たのかをもっと知りたい。「戦争以前からの未亡人」たちは、植民地アイルランドの国内経済にどのように貢献していたのか？彼らの内戦の体験は？戦争以前から未亡人であったことは、女性が交渉し、戦争を生き抜く力という観点で、何らかの差異を生み出したのか？

Ⅲ. 歴史と記憶

2010年10月22日、アルスタ反乱開始の記念日に、アイルランド大統領メアリ・マカリースによって、1641年反乱の宣誓供述書のウェブサイト、およびトリニティ・カレッジ・ダブリン大学のロング・ルーム人文学研究所で同時開催された特別展「混乱のなかのアイルランド Ireland in Turmoil」が公開された¹⁹。彼女は「1641年の出来事は相当の対立と論争の対象となってきました。…事実と真実はそのなかで犠牲にされ続けており、数世代にわたって歪められた認識の蒸留は、両陣営が互いに謎に困惑しあう事態に寄与したのです」と述べた。大統領は、以下のような認識で彼女の鋭敏な演説を結んだ。

宣誓供述書の公開後もなお、私たちが共通の歴史に合意することはなさそうです。けれども、共通の未来、共有される平和な未来をもつためには、弾薬を求めて過去をあさり、憎悪と不信のさらなる拡大を正当化することで得るものはないことについては、私たちは合意できます。しかし、過去を冷静かつ首尾一貫して調査することからは、あらゆるものを得るべきです——より総合的に互いの感情を理解し、互いにわかりあえるよう、この島のあらゆる人びとと伝統のあいだにより隣人関係と理解、そして協力関係の新たな歴史を作り出すべく、歴史の邪な力を越えるのを助けるために²⁰。

架橋と和解は、メアリ・マカリース政府のテーマであり、それはある意味、2011年5月のエリザベス2世の公式訪問によって完全に実現した。しかし、この1641年展の除幕は、私たちが共有し、かつ対立する過去を、過去に縛られることなく認識する重要性について、強力な声明を発する機会を彼女に与えたのだった。

イアン・ペイズリー（故バーンサイド卿）も除幕式に参列し、同ウェブサイトと展示に応答した——彼は、かつては繰り返し1641年に言及し、反カトリック感情を煽ろうとした人物である。「個々の悲惨な物語がここにあり、私たちの国土の悲惨な物語もここにあります。これを学ぶことは、私

¹⁹ 「混乱のなかのアイルランド」と題する特別展は、宣誓供述書と関連史料をトリニティ・カレッジ・ダブリン大学のロング・ルーム貴重書図書館において2010年10月から2011年4月まで公開したものである。同展示のヴァーチャル・ツアーは下記で閲覧できる。<http://www.tcd.ie/Library/assets/swf/Exhibitions/1641/TCD/>.

²⁰ 大統領の演説全文は、以下を参照。‘Remarks by President McAleese at the launch of the 1641 Depositions ‘Ireland in Turmoil’, The Long Room, Trinity College Dublin’, 22 October 2010, <http://www.president.ie/index.php?section=5&speech=878&lang=eng>; accessed 2 August 2011.

たちが何者であり、なぜ私たちが、島の分断に帰結することになる私たち自身の困難を目の当たりにせねばならなかったかを知ることであると私は信じます。国民が自らの過去を忘れることは自殺行為です」。続ける彼の声は（全盛期の雷声とは大違いに）ほとんど囁き声となり、両国の和平プロセスを大きく進めた労働党の首相トニー・ブレアの言葉を言い換えて以下のように述べた。

私たちの前に、これらの事例のなかに、歴史の本物の手があります！…そして今晚、その手は頁を越え、世紀を越えて私たちにふれるのです。問題は、私たちがこれからどうするのかです。この手をつかみ、しっかり握って、その成果を私たちの学校に取り入れましょう。私たちが過去から教訓を学ぶとき、私たちはこの島に住む全員のために、安定し見込みある未来の鍵を開けることができるかもしれないのです²¹。

アイルランドが平和であるという事実は、政治指導者たちがこのような演説を行うことや、比較的最近まで国家と市民、研究者を分裂させる企てであった歴史プロジェクトを、このような情熱をもって受け止めることを可能にした。学術研究者、学生、市井の研究者に加えて、学校の生徒たちが1641年反乱の宣誓供述書に関与し、同史料がアイルランドおよび世界の幅広い公衆に到達することを確実にした。2014年にダブリンの外務省は、1641年反乱の宣誓供述書を北アイルランドの学校〔教育〕に取り入れるためのプロジェクトを助成した。統合教育のための北アイルランド評議会（the Northern Ireland Council for Integrated Education）と同地区の中等教育の教師たちとの緊密な協働のもとで、14歳の子供たちの授業のためのモジュールが開発された²²。「ヒストリ・アイルランド」は、1641年の「ヘッジ・スクール hedge school」を設けて、歴史と記憶、アイデンティティと党派主義に関するより一般的な議論を促進した²³。これらのどれもが、アイルランドが戦時下にあったときには不可能だった。

アイルランド全島における平和は、私たちが異なるやりかたで過去にアプローチすることを可能にした。これはイーサン・シェイガン（Ethan Shagan）が1641年に関する論考のなかで指摘したことである。

アイルランドの17世紀はついに記憶から歴史へと移り変わり、歴史家に貴重な機会を提示しているのかもしれない。…その連関性は薄れてゆくかもしれないが、それらは17世紀アイルランドの新しい問いと新しい解釈に向かう新たな道を指し示すことができる。それは帝国主義と内戦の遺産を越えて、アイルランドを別の歴史的コンテクストに据えるものである。…過去の暴力

²¹ バーンサイド卿イアン・ペイズリーの演説は、以下を参照。Dr Ian Paisley, at the launch of the 1641 Depositions 'Ireland in Turmoil', The Long Room, Trinity College Dublin, 22 October 2010.

²² <http://1641.tcd.ie/learning/>.

²³ <http://www.historyireland.com/hedge/>.

は、(フランスやスペインの歴史に暴力が統合されているようなやりかたで) その暴力の子孫たちの現在の主観的立場に言及することなく、アイルランド史に有益に統合することができるのかもしれない²⁴。

1641年反乱の宣誓供述書オンライン化プロジェクトはこの一端を成し、新たなモードの解釈を可能にする。そこではアイルランドの歴史記述は帝国主義と内戦の遺産から解き放たれ、代わりにまったく異なるコンテキストにアイルランド史を置き直すことができる。私たちはまた、このプロジェクトを通じて古典古代から現在までの歴史における、残虐行為と虐殺、民族浄化にまつわる問題を学際的なベースで探求したいと考えている。残虐行為、虐殺、民族浄化が起きる理由を理解することの現代世界における意義は誇張しすぎることはない。供述書は、レディ・アン・バトラーの供述が示すように、アイルランド自身の大量殺人と民族浄化の経験を記録するものである。これらの過去の残虐行為と虐殺の出来事を学び、それらがなぜ起きたのか、犠牲者がいかにして生き延び、彼らがいかに記憶したか、また、加害者がいかに罰され、コミュニティがいかに和解した(しなかった)かを明らかにしようとすることで、私たちの現代の理解はより情報豊かなものになるのである。

²⁴ Ohlmeyer and Ó Siochrú (eds.), *Ireland 1641*, p. 12.